

綾歌町内遺跡発掘調査報告書

第 3 集

平成 1 0 年度国庫補助事業報告書

熊倉池東古墳

西長尾城跡

1999. 3

綾歌町教育委員会

は じ め に

我が綾歌町には、縄文時代晩期以降の各時代に、先人の手によって築かれた文化遺産が数多く残されています。なかでも弥生時代後半期から古墳時代前半期にかけては、近年の発掘調査等により、かなり密度の高い内容であることが確認されています。

町及びその他の開発事業等に伴って発掘調査された様々な遺跡について、さらに調査研究を重ね、古代の生活等を明らかにするとともに遺跡を保護し、後世に伝えることは私達の使命であると考えます。

綾歌町では、平成8年度より国庫ならびに県費の補助によって綾歌町内遺跡発掘調査事業を実施しており、今年度についても、継続して実施した調査成果としてこの報告書を発刊することになりました。

今年度は、栗熊西熊倉地区において開発の計画がなされている区域内で、昨年実施した現地踏査によって埋蔵文化財包蔵地の可能性があると考えられた地点について試掘調査を実施した結果、古墳時代後期に築造された熊倉池東古墳が確認されました。

この付近には、平尾墳墓群、定連遺跡、定連池東丘古墳群、宇閑神社古墳等が築造されており、当時の有力者の埋葬課程の解明に期待が高まります。

さらに、一昨年度から継続実施している岡田上国吉地区での中世城郭跡として名高い西長尾城跡分布確認測量調査では、本丸から北東部にかけて延びる2筋の連郭式郭列及びその周辺の遺構分布状況が把握されつつあり、西長尾城の内容解明に向けた資料整備は、着々と構築されつつあります。

これからも、我が綾歌町に所在する貴重な文化遺産を、後世に伝えていくためにも、調査の成果が貴重な資料として活用されることを望みつつ、当事業の継続的な実施を予定しております。

最後になりましたが、これらの調査にあたりましてご理解とご指導をいただきました県教育委員会文化行政課をはじめ関係各位、また調査にご協力とご援助をいただいた方々に厚くお礼を申し上げます。

平成11年3月31日

綾歌町教育委員会教育長 西 浦 廣 海

例 言

1. 本書は、綾歌町教育委員会が平成10年度国庫補助事業として実施した綾歌町内遺跡発掘調査事業の概要報告書である。
2. 今回の遺跡発掘調査事業は、熊倉池東古墳、西長尾城跡を対象とした。
3. 今回の発掘調査事業の現場に関する部分は、綾歌町職員近藤武司が調査員として担当し、綾歌町教育委員会新居勉が補助員として担当した。
4. 平板測量の西長尾城については近藤と新居が、熊倉池東古墳については近藤と國木が行った。
5. 熊倉池東古墳試掘トレンチ内の実測については、近藤が行った。
6. 製図作業の西長尾城については、新居が行い、昨年度までの成果に合成した。また、熊倉池東古墳についての墳丘測量図は新居が、土層実測図は近藤がそれぞれ行った。
7. その他、本書の執筆・編集は、近藤と新居が共同で行った。
8. 本書の実測図の縮尺は全てスケールで表示した。また遺構実測図中の方位は、熊倉池東古墳については磁針方位で、西長尾城跡については国土座標第IV系による方位で示した。
9. 出土遺物及び図面は綾歌町教育委員会にて保管している。
10. 熊倉池東古墳試掘調査にあたっては、香川県立香川中央高等学校教諭國木健司氏及び香川中央高校学生諸氏の、また西長尾城跡測量調査にあたっては、東信男氏のご指導ご援助を得た。ここに記して謝意を表する。
11. 挿図については、国土地理院の25,000分の1地形図を調製した綾歌町管内図（承認番号 四複第134号）及び綾歌町航空測量図を使用した。

目 次

本 文 目 次

第Ⅰ章	平成10年度綾歌町内遺跡発掘調査事業概要	1
第Ⅱ章	熊倉池東古墳試掘調査	4
	1. 地理的環境	4
	2. 歴史的環境	4
	3. 調査に至る経緯	5
	4. 調査結果の概要	6
	5. まとめ	7
第Ⅲ章	西長尾城跡測量調査	11
	1. 地理的環境	11
	2. 歴史的環境	11
	3. 調査に至る経緯	12
	4. 地形の概要	13
	5. まとめ	14
第Ⅳ章	まとめ	20

挿 図 目 次

第1図	平成10年度綾歌町内発掘調査事業対象地	3
第2図	周辺の遺跡分布状況	5
第3図	熊倉池東古墳墳丘測量図	8
第4図	試掘トレンチ土層実測図	9
第5図	西長尾城縄張り図	12
第6図	今回までの調査範囲遺構分布状況	13
第7図	西長尾城遺構測量図	17

表 目 次

第1表	遺構一覧	15
-----	------	----

図 版 目 次

図版1	熊倉池東古墳全景（西より）	10
図版2	古墳墳丘全景（東より）	10
図版3	伐開作業風景	10
図版4	積み石列状況	10
図版5	周溝部状況	10
図版6	土層堆積状況（2トレンチ）	10
図版7	西長尾城遠景（北より）	19
図版8	伐開作業風景	19
図版9	連郭式郭列状況	19
図版10	連郭式郭列（第15郭より）	19
図版11	井戸跡（上部より）	19
図版12	豎堀遺構（上部より）	19

第1章 平成10年度綾歌町内遺跡発掘調査事業概要

一昨年度から国庫及び県費補助金により、綾歌町内に所在する遺跡の確認調査を実施しており、今年度についても同事業を継続して実施することになった。

国庫補助申請については、平成10年4月30日付けで提出し、平成10年8月31日付けで交付決定を受けた。

県費補助申請についても、同じく平成10年4月30日付けで提出し、平成10年8月31日付けで交付決定を受けた。

今年度については、熊倉池東古墳の試掘による分布確認調査と一昨年度より実施している中世城郭として町南部連山の城山に位置する西長尾城跡の測量による分布確認調査の2件の調査を実施した。

熊倉池東古墳試掘調査については、当該地に民間の土砂採取が計画されたことに伴い、町教育委員会が踏査を実施したところ、自然石が段状に直列している箇所があることから古墳の可能性が強いとして、開発業者と協議のうえ、試掘調査を実施することとなった。

試掘調査は、石列を軸とした1トレンチを設定して調査をすすめたが、石列は露出していた裾部分から2.0mで途切れた為、1トレンチに直交する2トレンチを設定した。その結果、1トレンチで検出した石列より40cm奥まった位置から平行して続いた。このことから石室とそれに付帯する羨道部である可能性が非常に強まった。

試掘調査に並行して墳丘の測量調査を実施したところ、石列の延長上を中心に直径約9mの高まりを確認するとともに、その周囲で部分的ではあるが溝状の落ちを確認することができた。

この結果、当該地は横穴式石室を主体に持つ円墳であり、古墳時代後期に築造された有力者の墓であることが判明した。

町では、調査の結果からこの熊倉池東古墳の取り扱いについて、現状保存が望ましい重要な遺跡であると認識し、この結果を開発業者に通知するとともに、今後の取り扱いについて協議を進めているところである。

西長尾城跡測量調査については、一昨年度より実施している遺構分布状況の確認を主体にした平板による測量を継続して実施することとした。

今回は、本丸から北東に延びる2筋の尾根のうち、西側の尾根とそれらの間に挟まれた井戸のある谷筋部分を中心に測量を実施した。

まず、井戸のある谷を中心に伐開作業を進め、西側の尾根へと範囲を広げていった。この尾根について東側の尾根と同様に連郭式郭列が配されているが、東尾根の連郭式郭列と比較すると、郭の整形課程における明らかな違いが見られ、形状が異なっている。

ほとんどの郭が登山道等によって部分的に破壊されている箇所があるため、遺構の形状について確認しかねる部分もあるが、大まかな分布状況については今回までの調査でうかがい知ることができた。

また、新旧西長尾城の変遷過程における改築の痕跡を残していると考えられる箇所も見られ、改築の過程についても今後の研究に活用できる貴重な資料が得られた。

今回の調査では、調査員の時間の制約等により、測量をするまでには至らなかったものの、西側の連郭式郭列のさらに西側の斜面で、2本のしっかりした塹堀状の遺構が検出さ

れた。

2筋の連郭式郭列に挟まれた谷部分についても、今回の調査によって防塞施設が配置されていることも確認できたが、この正確な用途については不明であるので今後の調査による解明が期待される。

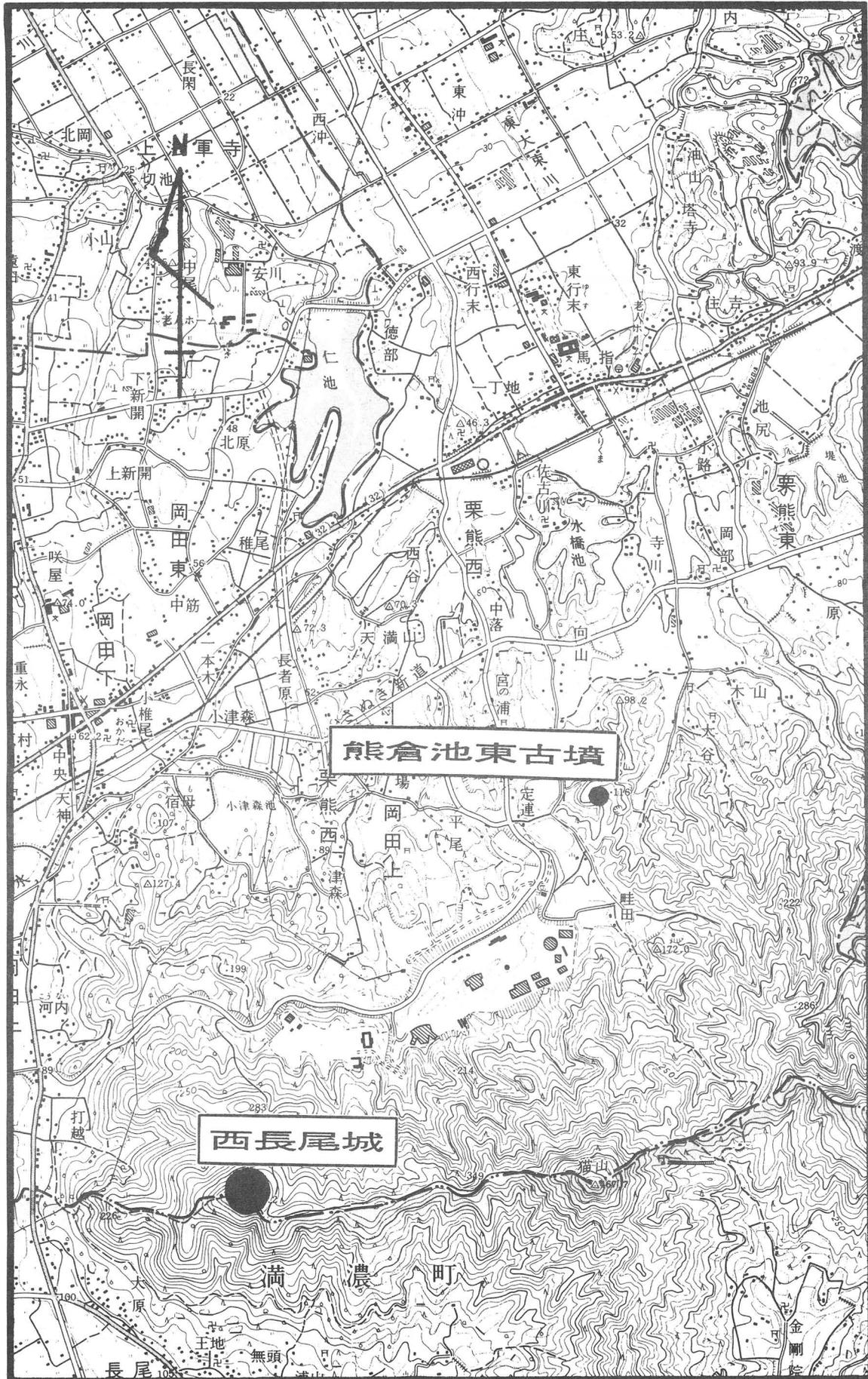
一昨年からの調査により、本丸付近及び本丸から北東に延びる2筋の尾根に連なる連郭式郭列の分布状況等の調査を実施してきたことにより、大方の内容は把握されつつある。

次年度以降については、連郭式郭列の周囲の豎堀等の配置状況及び東尾根に延びる櫓跡へと調査範囲を広げ、西長尾城の性格及び全容を明らかにしていきたい。

以上、町内2ヶ所にて確認調査を実施し、調査総面積は4,400㎡であった。

平成10年度の町内遺跡発掘調査事業は、平成10年9月1日より実施し、平成11年3月31日に終了した。

第1図 平成10年度綾歌町内遺跡発掘調査事業対象地



熊倉池東古墳

第II章 熊倉池東古墳試掘調査

調査対象地	綾歌町栗熊西字熊倉 2 2 1 番地
調査期間	平成10年12月26日～12月27日
調査面積	400㎡

1. 地理的環境

綾歌町は、香川県のはぼ中央に位置し、高見峰、猫山、城山の連山を南限とし、北側には肥沃な丸亀平野が広がる。

町域の北側は低丘陵を境にして飯山町と接し、また、北東部は横山連山を境に坂出市と接しているため眺望は遮られている。一方、北西部は土器川地域の沖積平野に向かって幾筋もの洪積台地の尾根筋が延びており起伏に富んだ地形を形成している。

また、町の中央部は、南方の連山に源を発した大東川水系に沿って盆地状の沖積平野が広がっている。

このように、綾歌町では地形・気候・水利にめぐまれ、生活するには非常にすぐれていることもあり、古くから人々の生活が営まれていたようである。

また、綾歌町からは、堤山北裾の低地を抜けると容易に綾川水系の沖積平野である羽床盆地にたどりつくことができるので、この地域とは密接に交流を行っていたと推察できる。さらに、大東川水系で結ばれた海浜部との交流も行われていたと推察される。

熊倉池東古墳は、大東川水系の水源でもある綾歌町南部の猫山連山から北に派生する尾根上に位置し、同尾根上には、弥生時代庄内式併行期の定連遺跡、前期古墳の定連池東丘1号墳等の定連池東丘古墳群や畦田古墳群が所在する。西側の谷を隔てた尾根上には、横穴式石室を有する後期古墳の宇閑神社古墳や弥生時代から古墳時代にかけて築造された平尾墳墓群が所在する。

2. 歴史的環境

綾歌町内では、ここ最近の発掘調査により行末西遺跡、佐古川遺跡、佐古川・窪田遺跡から縄文時代晩期の土器が発見されるようになってきた。遺構の確認までには至っていないものの、遺物の採取量からみても当該期には、既に人々の生活が営まれていた地域であることは容易に推察される。

弥生時代に入ると次見遺跡、行末遺跡、行末西遺跡、佐古川遺跡、下土居遺跡、佐古川・窪田遺跡といった集落遺跡が確認されている他、墳墓としても平尾墳墓群、石塚山古墳群、定連遺跡等が確認されている。

また、佐古川・窪田遺跡では、弥生時代前期後半から中期初頭にかけて築造された大規模な周溝墓群が確認されている。

古墳時代に入ると、集落遺跡は行末西遺跡、佐古川遺跡、佐古川・窪田遺跡でわずかに確認されているだけであるが、古墳についてはあらゆる所に多種多様なものが築造されるようになってくる。

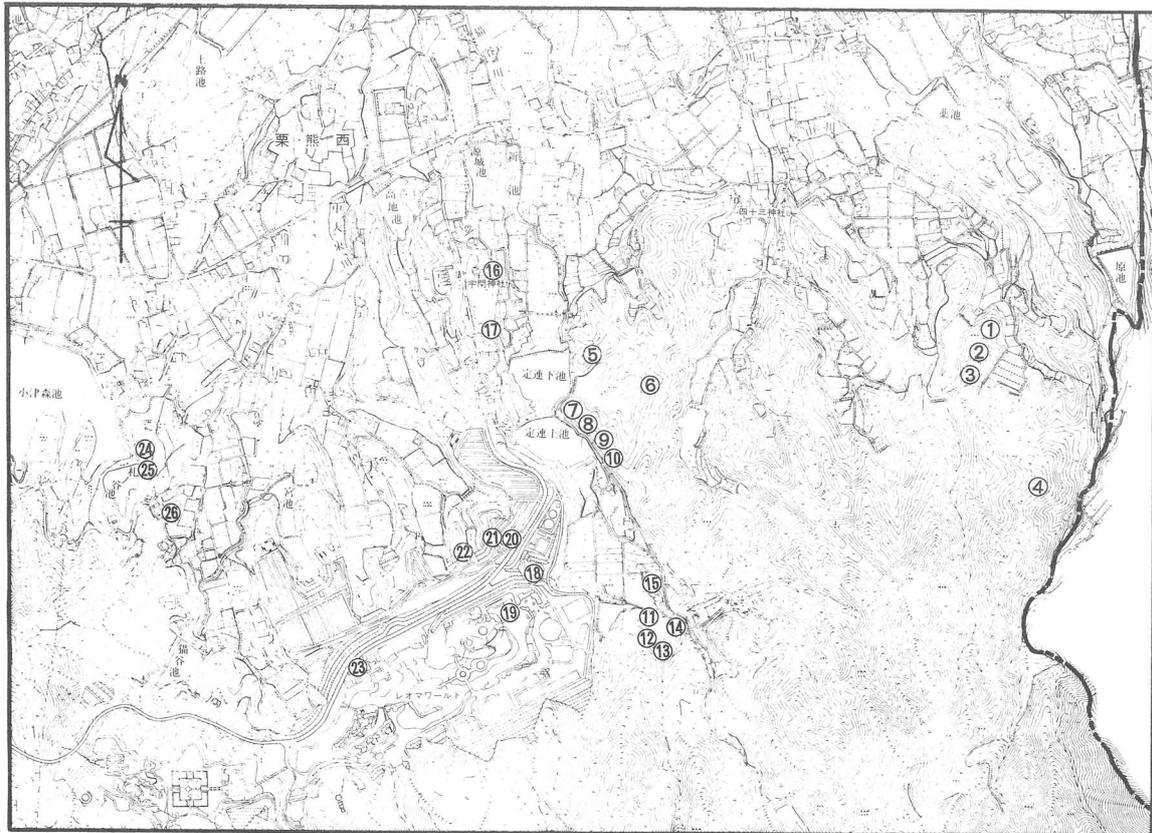
快天山古墳、陣の丸古墳群に代表されるような有力墳が尾根上に築造されたり、岡田台地上には車塚を中心として数十基の中小円墳から構成される岡田万塚古墳群が形成される

岡田万塚古墳群は早くからの開墾等によりほとんどが消滅しており、現在その姿を残しているのはわずか6基となっている。

古代については、原遺跡、庄遺跡、北原遺跡で集落跡が発見されている。

中世に入る頃には、坂出市と境界をなす横山山頂に横山廃寺が建造されたり、中世後半期には南部連山の城山で長尾大隅守元高が西長尾城を築造し、高見峰山塊にも栗隈城を築くなど、豊臣秀吉の四国征伐により滅ぼされるまでの二百年余り、その一族や土佐の長宗我部一族が勢力をほこっていた。

各時代を通じて近隣地域との交流が行われていたことを裏付けるように、他の地域で生産されたと思われる土器も多く発見されている。



- | | | |
|------------------|-----------------|-----------------|
| ① 休場池東丘1号墳 | ⑩ 定連池東丘4号墳 | ⑲ 平尾3号墓〔弥生中期末〕 |
| ② 休場池東丘2号墳 | ⑪ 畦田古墳1号墳 | ⑳ 平尾4号墳〔古墳前期前半〕 |
| ③ 休場池東丘3号墳 | ⑫ 畦田古墳2号墳 | ㉑ 平尾5号墳〔古墳前期〕 |
| ④ 栗隈城（湯船城）〔室町〕 | ⑬ 畦田古墳3号墳 | ㉒ 平尾6号墳 |
| ⑤ 定連遺跡〔弥生・庄内併行期〕 | ⑭ 畦田古墳4号墳 | ㉓ 平尾7号墳 |
| ⑥ 熊倉池東古墳〔古墳後期〕 | ⑮ 畦田古墳5号墳 | ㉔ 岡田1号石棺 |
| ⑦ 定連池東丘1号墳〔古墳中期〕 | ⑯ 宇閑神社古墳〔古墳後期〕 | ㉕ 岡田2号石棺 |
| ⑧ 定連池東丘2号墳 | ⑰ 宇閑神社南古墳 | ㉖ 津森穴薬師古墳 |
| ⑨ 定連池東丘3号墳 | ⑱ 平尾2号墓〔弥生後期前半〕 | |

第2図 周辺の遺跡分布状況 (S=1:20,000)

3. 調査に至る経緯

平成9年4月25日香川工業株式会社より綾歌町栗熊西定連地区について、埋蔵文化財の所在の有無及びその取り扱いについての照会があり、綾歌町教育委員会は、平成9年5月4日及び5月10日、開発区域内について現地踏査を実施した。

その結果、稜線部よりやや西に下ったところに石列が露出している箇所を確認した。さらにピンポールにより地表下の状況を探ると、その石列が積石であることも確認できた。周辺の地表下の探索においても石材の所在が確認できた。さらにその周りには、墳丘の盛土に利用するための採土及び排水のための堀切であろうと推定される落ちが確認された。

これらの調査結果から、横穴式石室を持つ古墳の可能性が非常に強く、推定規模として直径約1.3m程度の円墳と推定された。

以上のことがらについて、平成9年5月13日開発業者に文書で回答するとともに、試掘調査の必要性を説明し、今後の日程調整等協議することとした。

伐開作業については、開発業者と協議の上、平成10年11月11日から試掘調査に先駆け実施していた。

試掘調査については、諸般の事情により平成10年12月26日及び27日の2日間と短期間にて実施した。なお、埋蔵文化財発掘調査の報告については、平成10年12月26日付けにて提出した。

調査方法は、事前の現地踏査で確認している列石が古墳に伴う遺構であることの有無及びその内容確認のため、トレンチを主体とした試掘調査を実施した。また、墳丘の形状及び規模を確認するために、平板による測量調査を併せて実施した。

4. 調査結果の概要

今回の調査では、当該地が遺跡であることの確認をするため、まずはじめに、すでに露出していた列石に沿って1トレンチを設定した。

後世の攪乱により不明な点も残されるが、露出していた列石についてはすべての石材が地山に到達していること及び上部の石材についてはわずかに位置を変えている形跡もみられるが、底石がほぼ直線上に配列されるため古墳構築時の石積みであると容易に推察されることが出来る。またその形態から、横穴式石室に付帯する羨道部の壁石であると推察される。

上述の列石は、先端部より約2m奥まった位置で終結していた。そこで、列石の北端部にて、1トレンチに直交する2トレンチを設定した。すると、地山直上にて北端の石材より40cm奥まった地点で羨道部に平行する石列を検出することができた。

この石列は、裏込め土も残存しており、古墳構築時に合わせて積まれた石材であることが確認でき、玄室の側壁であると推察することができる。

古墳の主体部の確認ができたことにより、古墳の規模及び形状を確認するため、墳丘の東部の周溝と考えられる部分について、確認のため3トレンチを設定した。

その結果、地山を掘りこんだ溝であることを確認するとともに、ごく微量ではあるが土師器片を採取することができた。

これらのことから、当遺跡については、周溝を保持する古墳時代に築造された古墳である可能性が非常に強まった。

墳丘の測量調査については、平板により実施し、コンターラインは25cm間隔とした。

その結果、列石を中心とした直径10m程度の高まりがあり、その東西両端部の北寄りの部にて周溝であろう落ちを確認することができた。

南西部では、僅かにテラス状の平坦部があり、その西側は掘削を受けている為、周溝で

あるかの確認にまでは至らなかった。尚その掘削部については、当時の墳丘構築時の採土痕である可能性も強い。

また、北西部でも僅かに周溝と見られる溝状の落ちを確認した。

南北部については、明確な遺構は確認できなかった。

5. まとめ

調査地は、町南部の連山から派生する尾根上に位置し、周囲には平尾墳墓群をはじめとする墳丘墓や古墳が、数多く点在する地域内にある。

熊倉池東古墳は、これまでに調査の経緯もなく、所在についても確認されておらず、今回の開発計画により、新しく発見された遺跡である。

ほぼ隣接する位置で、弥生時代庄内式併行期に築造された墳丘墓である定連遺跡や古墳時代前期後半から中期初頭に築造された定連池東丘1号墳が所在することから、同時期の遺跡の所在の可能性を中心に調査を進めた。

事前に行った踏査により、列石が確認されたことから後期古墳である可能性も強まり、以後の調査方法について検討をした後、試掘調査を実施した。

その結果、直径9～10mの墳丘部を持つ円墳であることが確認された。また、墳丘の東西両端部で周溝の所在も併せて確認することができた。墳丘の裾部が周溝の底部に到達していることから、その周溝は古墳の築造後に改めて掘下げられたものではなく、古墳築造時に併せて計画的に配置されたものであることが窺える。

主体部は、後世の攪乱を受け天井石及び側壁の上部を欠くものの、南方に向けて2m以上の羨道部を持ち、片袖または両袖式の横穴式石室である可能性が高い。

築造時期については、土師器片を採取したが、それだけでは時期特定には至らないものの、主体部横穴式石室を持つこと及び、羨道部が短いこと等から考察すると古墳時代後期に築造されたと考えるのが妥当である。

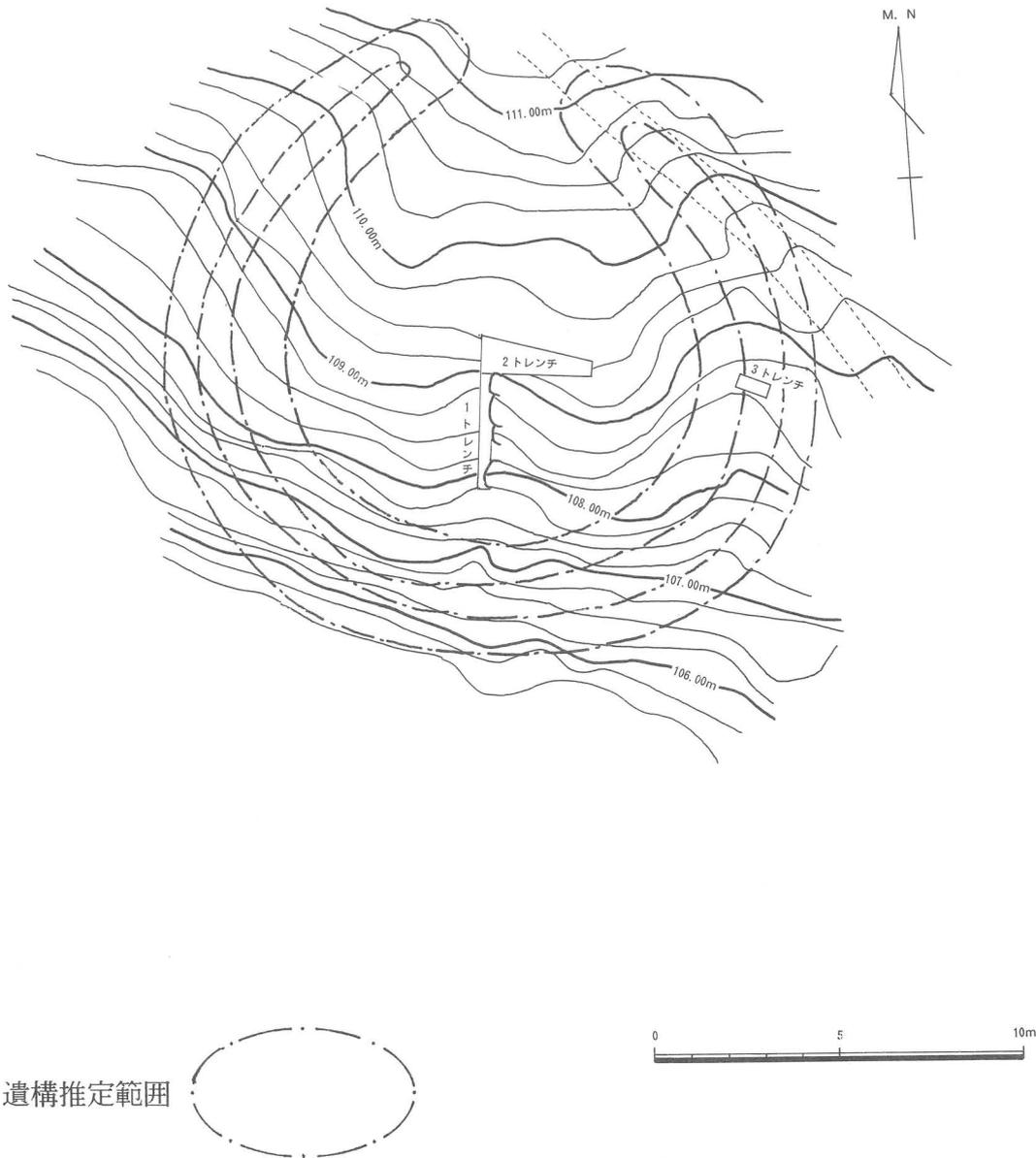
以上のことから熊倉池東古墳は、盗掘を受けているものの町内では数少ない横穴式石室を主体部に持つ古墳であることから、今後の研究において貴重な資料になり得るため、当古墳の現状保存が望ましいものと考えられる。

発掘調査の結果については、平成11年1月18日付け綾歌教委発第18号にて香川県教育委員会に対して報告すると共に、開発業者に対しても同日綾歌教委発第19号にて回答し、開発の計画変更を併せて要望した。

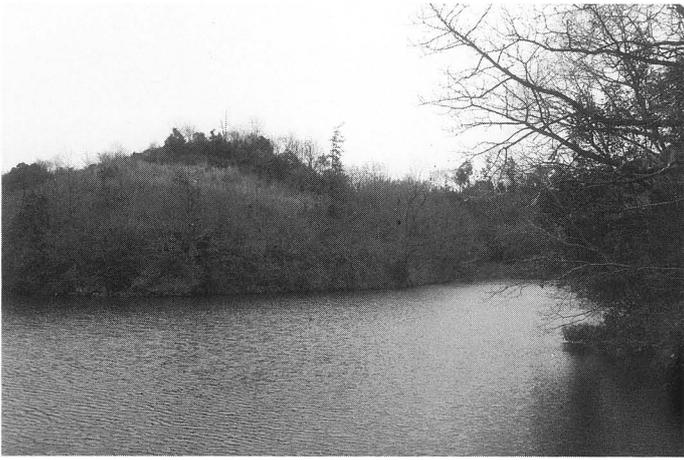
第 3 図

熊倉池東古墳墳丘測量図及びトレンチ配置図

(S = 1 : 200)



熊倉池東古墳



図版1 熊倉池東古墳遠景（西より）



図版2 古墳墳丘全景（東より）



図版3 伐開作業風景



図版4 積み石列状況



図版5 周溝部状況



図版6 土層堆積状況（2トレンチ）

西長尾城跡

第三章 西長尾城跡測量調査

調査対象地	綾歌町岡田上字国吉2312-10, 2312-13
調査期間	平成10年9月1日～平成11年3月11日
調査面積	4,000㎡

1. 地理的環境

綾歌町は、肥沃な丸亀平野の東南部に位置し、阿讃山脈の最前線をなす高見峰、猫山、城山の連山を南限とする。町北東部については、横山連山が南北に延びており平野部からの眺望は遮られている。北西部は土器川沿いの沖積平野に向かい、幾筋もの洪積台地の尾根筋が延びており起伏に富んだ複雑な地形を形成している。

町中央部については、南方の連山に源を発する大東川水系により盆地状の沖積平野が広がっており水利の便もよく、阿野郡条里の方格地割が現在においても良好に残存している。

西長尾城跡は南部の連山の中でも西端に位置する標高375.2mの城山(Siroyama)丘陵部に位置する。頂上からの視野は、東部については城山と同じ丘陵に連なる猫山、高見峰により視界を遮られるが、その他の方位については広く眺望することができる。

また、城山の南、西、北面は急峻な要害地形をなし、丘陵尾根や斜面上部を加工し郭等の防御施設の役割を果たしている。

2. 歴史的環境

綾歌町では近年の発掘調査により、平野部で縄文時代晩期の生活用土器が発見されるようになってきたことから、少なくとも3,000年前頃には人々の生活が行われていたことが分かってきた。

弥生時代になると、行末遺跡に代表される前期の集落遺構が確認されている。後期に入ると次見遺跡や下土居遺跡また近年の発掘調査では行末西遺跡、佐古川遺跡、椎尾遺跡、椎尾東遺跡、佐古川・窪田遺跡でも集落遺構が発見されている。このような人口と生産力の増大を背景に造墓活動も活発に行われてきたようで、南部の丘陵部に平尾墳墓群、石塚山古墳群、定連遺跡等が形成されている。また、近年の発掘調査では、佐古川・窪田遺跡で最古級の周溝墓群が発見されている。

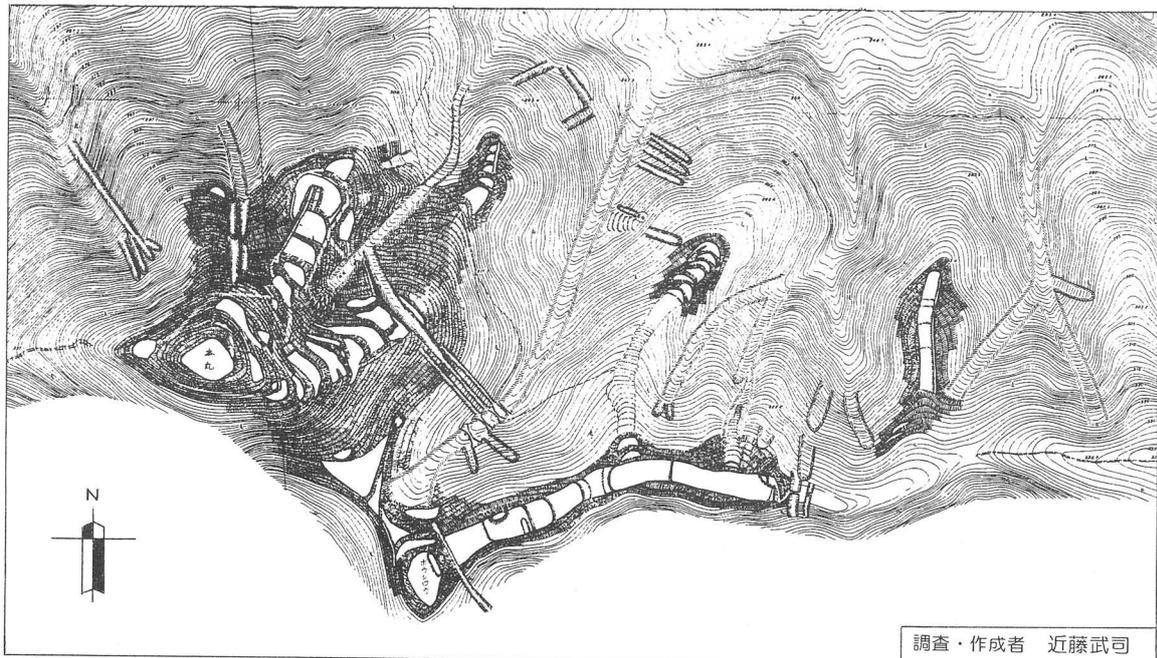
古墳時代に入ると町の西部では岡田台地上に岡田万塚古墳群、北原古墳のように多種多様な古墳が築造されていたり、東部では快天山古墳、陣の丸古墳群、横山古墳群、横峰古墳群等の築造、集落遺構としては行末西遺跡、佐古川遺跡、椎尾遺跡、佐古川・窪田遺跡が確認されている。

特に弥生時代後期から古墳時代にかけては、遺跡の密度も高く非常に栄えていた時期であることがうかがえる。

古代には、原遺跡、北原遺跡で集落が確認されている。

中世に入る頃には坂出市との境界をなす横山山頂に横山廃寺が建造され、後半期に入ると南部連山の城山に西長尾城が築城される。また、集落としては近年の調査により岡田台地で北山遺跡が確認されている。

西長尾城は、三野郡詫間郷管御崎を領して海崎伊豆守と名乗り白峰合戦での軍功を認め



第5図 西長尾城縄張り図 (S=1:4,000)

られた長尾大隅守元高が応安元年(1368)城主となり、その後土佐の長宗我部元親配下の国吉甚左衛門の居城となり、天正13年(1585)の豊臣秀吉の四国征伐により廃城になるまでの二百年以上に渡って長尾一族及び長宗我部一族により守られてきた城である。

その間に長尾一族はこの地で勢力を伸ばして炭所、岡田、栗隈などに城を構えて阿野、鵜足、那珂郡の南部で勢力を誇った。

3. 調査に至る経緯

綾歌町は、綾歌町岡田上国吉地区から栗熊西平尾地区に至る約250.34ヘクタールを、綾歌町森林公園として整備を進めているところである。この中には城山を中心に広がる中世城郭跡の西長尾城跡の整備に関する計画も含まれており、どのような形で計画を進めていくのかを現在検討しているところである。

西長尾城について記述のある文献もあり、現在、西長尾城保存会を中心に研究をしているところであるが、内容の詳細については不明な状態であるので、町教育委員会では適切な調査をし、西長尾城の内容を把握したうえで整備計画を進めていくため、一昨年度より平板による測量調査を実施して、基礎資料作成作業にとりかかっている。

今年度についてもこの事業を継続して実施することになった。

測量調査にあたって、測量調査体制を整えると共に、まず香川県西部林業事務所と協議し、調査の為の立木伐採の許可を得て、平成10年9月1日より本格的な調査に入った。

立木伐開作業については、綾歌町シルバー人材センターへの作業委託とし、平成10年9月1日から同年11月19日までの34日間で実施し、延べ人数は150人であった。委託内容は、伐採・結束・搬出等の作業とした。

伐開範囲は、本丸から北東に延びる2筋の尾根の間の谷間、すなわち井戸跡の所在する谷間から西側の連郭式郭列部分とした。伐開総面積は約5,000㎡となった。

平板による測量調査については、調査員及び補助員の業務の都合により、日程的な制約を受けたこともあり、伐開した範囲全域については実施できなかったが、2つの郭を除いて主郭部の本丸から北面にかけてはほぼ分布内容を押さえることができた。今回実施した測量面積は約4,000㎡であった。

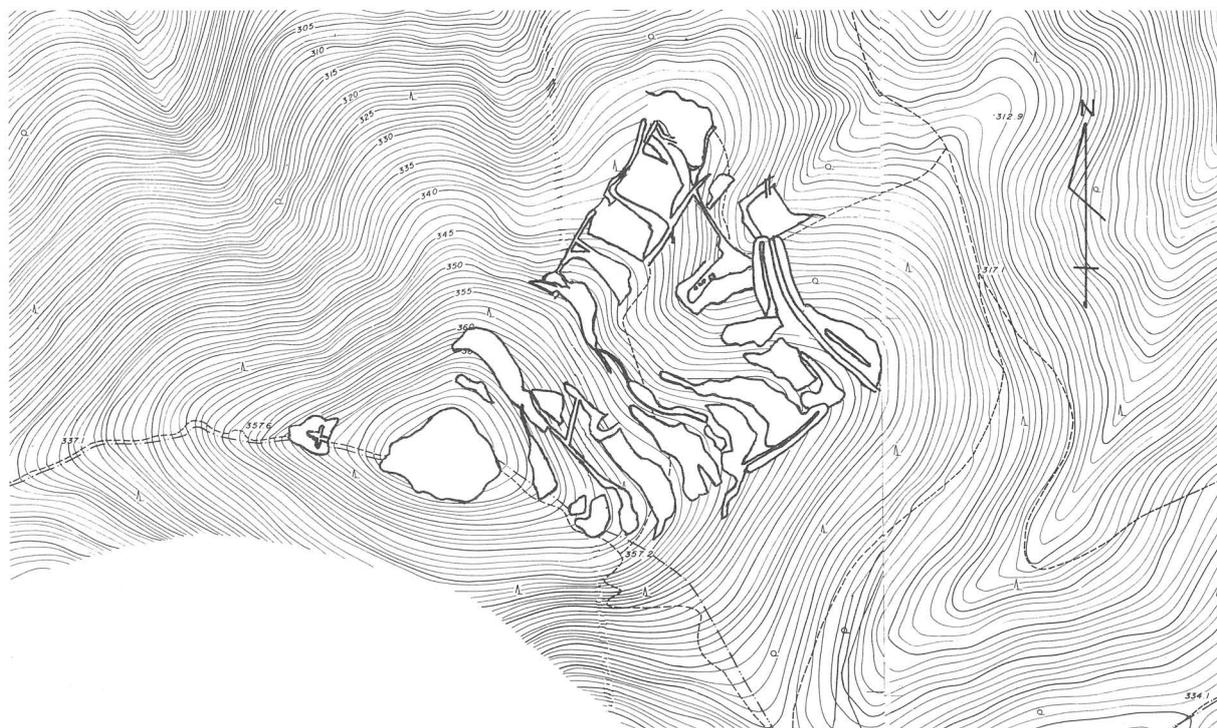
なお、発掘調査の報告については、平成10年9月7日付け綾歌教委発第283号で提出した。

4. 地形の概要

昨年度までに実施した遺構分布確認測量調査によって約10,000㎡については遺構の分布が確認されている。

山頂部（本丸跡）より北東方向に2筋の稜線が走っており、その東側の尾根上には連郭式郭列が大小合わせて10段設けられ、西側の尾根上にも同様に連郭式郭列が12段連なっている。

東側の郭列については、下から3段において南東肩に高さ1メートル、長さ30メートルにわたる土塁が造られており、西側の郭列についても、同様に北西端にそれぞれの郭に連続するように土塁が設けられている。このことについて推察すると北からの攻撃に対する防御と併せて、東側及び西側についても警戒していると考えられる。



第6図 今回までの調査範囲遺構分布状況 (S=1:1, 000)

西側の尾根筋との間には唯一の水源となる谷筋があり、4基の井戸が設けられていることから、この水源を守る水の手郭の役目をもっていたものと推察される。

なお、この井戸については積石もみられるが湧き水を汲み上げるのではなく雨水等を溜めるものと考えられる。

今回の調査によって、この井戸郭の奥付近の斜面に大小12本の連続する畝状の堅堀が

新しく検出された。これらの連続竪堀の用途については、根拠づけられる内容の確認がなされていないため、今後の研究課題となる。現段階の見解としては、この西長尾城の防御施設が、連郭式郭列やその外側に設けられた土塁・堀切及び竪堀だけでなく、城内にあたるこの井戸郭のある谷筋においても他の侵入を遮るために設けられていると考えている。

今回調査した西側の連郭式郭列については、郭と郭の段差は概ね2メートル前後で奥行き10メートル、幅15メートル前後のものが北東に向かって連続して設けられている。

その内、中間部分にあたる5段について西肩部分は土塁によって連なっている。また、この土塁からそれぞれの郭に進入するような通路状になっていることから、この土塁は城内移動用の通路及び各郭への虎口も兼ねて設置されているようである。

また、西長尾城内の通路については、未だ全体像は掴めていないが今回までの調査によって随所に見られるようになってきた。

さらに、この西側の郭列において西長尾城の旧城から新城への変遷における改築の痕跡が確認できる。第17郭から第19郭については下段の郭に面する肩部分が直線状に成形されており、そのそれぞれが平行に調整されていることから計画的に手を加えられたものと考えられる。

また、今回の調査によって新しく判明したもう1つの点は、城内の移動ルートにおいて第5郭の北部にて柵形虎口が設けられていることである。この柵形虎口の正確な用途は今後の調査によって解明していきたい。

5. まとめ

中讃を一望できる位置に所在する西長尾城は自然の要害地形を巧みに利用し、さらには複雑な防塞施設を備えることにより、より一層強力な防衛力を保持している。

一昨年度からの調査によって、西長尾城の城郭構成が着々と解明しつつある。これらの成果は、今後の調査結果と併せることにより、この地域における中世城郭の研究課程において、模範となり得る貴重な資料になると考えられる。

しかし、未だ未調査部分が多く、今後の課題も多く残されていることから、次年度以降についても当該調査を継続して実施していくことにより、西長尾城についての基礎資料の整備を早急に進めていきたい。

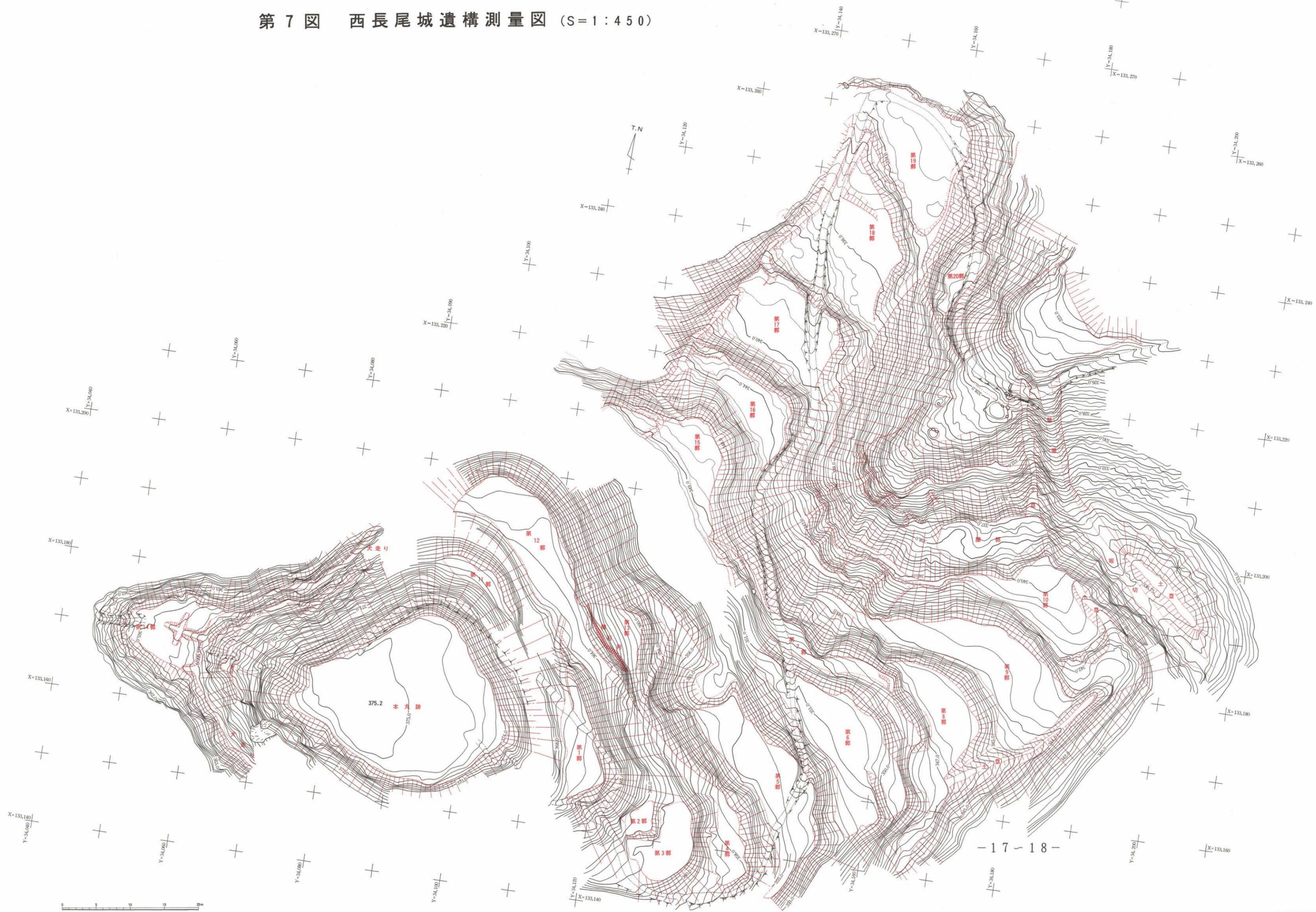
第 1 表 遺 構 一 覧

(No.1)

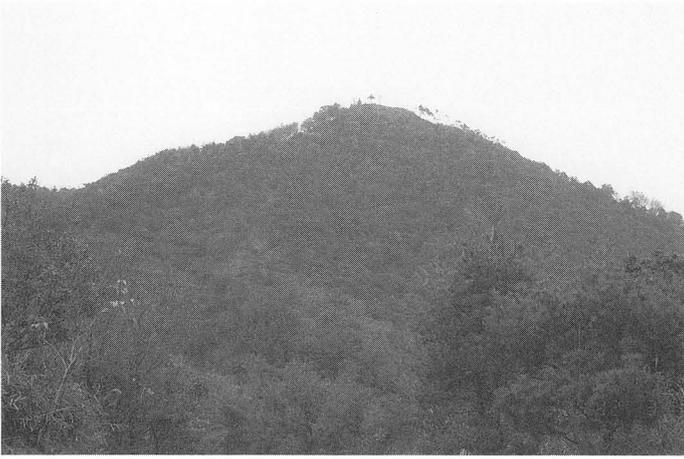
遺構の所在地	郭							郭等の付属施設			
	名称	形状	規模(m)	上段郭との高低差(m)	備考	名称	場所	規模(m) 長さ×幅×高さ(深さ)	備考		
山頂部	本丸跡	台形	23.0×22.0	—	礎石と思われる石が散布 以前瓦の散布もあった 登山道で一部破壊						
山頂部の東尾根	第1郭	三角形	18.1×5.2	7.5	登山道で一部破壊						
山頂部の北東尾根 (東側)	第2郭	三角形	6.5×4.0	4.5	登山道で一部破壊						
	第3郭	不定形	12.0×5.0	0.8	登山道で一部破壊						
	第4郭	不定形	14.5×5.3	2.0	登山道で一部破壊						
	第5郭	不定形	29.5×7.8	2.3	登山道で一部破壊						
	第6郭	不定形	30.1×9.5	2.5	登山道で一部破壊						
	第7郭	不定形	28.8×2.0	2.3	登山道で一部破壊						
	第8郭	不定形	30.5×7.2	3.2							
	第9郭	不定形	37.0×8.0	2.1							
第10郭	不定形	18.0×8.7	2.3								
						土塁	南東肩	28.6×4.0×1.0			
						土塁	北東肩 北東段下 北西段下 北東段下 堀切と連続	5.5×2.0×0.5 27.6×7.7×1.0 16.0×5.5 30.2×2.0×1.5 20.9×8.0×3.3			

遺構の所在地	郭						郭等の付属施設			
	名称	形状	規模(m)	上段郭との高低差(m)	備考	名称	場所	規模(m) 長さ×幅×高さ(深さ)	備考	
山頂部の北東尾根 (西側)	第11郭	不定形	13.3×3.0	4.8						
	第12郭	不定形	33.0×7.3	4.0						
	第13郭	三角形	11.5×6.0	2.2		積石列	南西側法面	13.5×2.0		
山頂部の西尾根	第14郭	不定形	10.5×11.0	9.0	瓦片の散布 登山道で一部崩壊	犬走り	東部南北端	幅1.0		
	第15郭	台形	17.2×5.5	.		虎口 虎口	東南端 西部両端	幅1.0 幅1.0		
山頂部の北東尾根 (西側)	第16郭	台形	13.5×7.4	4.0		虎口	西部両端	幅1.0		
	第17郭	台形	17.0×11.1	3.5	登山道で一部破壊	土塁 虎口	北西肩 東西両南端	幅1.0		
	第18郭	不定形	16.6×18.2	2.8	登山道で一部破壊	土塁 虎口	北西肩 東南端			
	第19郭	三角形	19.0×12.2	2.0	登山道で一部破壊					
	第20郭	台形	10.0×2.8	3.0	登山道で一部破壊					

第 7 図 西長尾城遺構測量図 (S=1:450)



西長尾城跡



図版7 西長尾城遠景（北より）



図版8 伐開作業風景



図版9 連郭式郭列



図版10 連郭式郭列（第15郭より）



図版11 井戸跡（上部より）



図版12 豎堀遺構（上部より）

第 IV 章 ま と め

綾歌町では、平成 8 年度から国庫及び県費補助により綾歌町内遺跡発掘調査事業を実施しており、今年度についても継続して実施することになった。

今年度については栗熊西定連地区熊倉池東古墳及び岡田上国吉地区西長尾城跡の 2 地区を対象に調査を実施した。

熊倉池東古墳は、昨年当該地に町内事業者により開発計画が提出され、踏査による分布調査によって確認された石列について、試掘確認測量調査を実施した。

調査は、試掘トレンチを主体とした土層及び包含遺物による遺構分布確認調査と、測量調査による墳丘確認調査を実施し、3本のトレンチと測量図を作成した。

この結果、熊倉池東古墳は、古墳時代後期に築造されたと考えられる横穴式石室を有し径 10 m の墳丘規模をもつ円墳と考えられる。ただ、主体部上部の石材及び天井石等の検出がなく、後世における攪乱を受けていると思われる。また、遺物等の検出も微量であり詳細まではつかみとることが出来なかった。

西長尾城跡は、岡田上国吉地区城山を中心に展開する中世城郭として古くから知られており、部分的に後世の開発等により破壊されているものの、ほぼ当時の姿を現在まで伝えている。

綾歌町が実施する町森林公園整備計画を進めるなか、その範囲内に所在する西長尾城跡の取り扱いについて様々な論議が交わされているが、西長尾城跡がどのように分布しているのかについての十分な資料の整備ができていなかったことから、協議も滞っている。

そこで綾歌町教育委員会では、平成 8 年度から西長尾城跡の遺構分布確認調査を実施し基礎資料の作成にとりかかっている。

調査は、平板測量による遺構分布確認調査で、今年度は本丸北東に延びる 2 本の尾根の内、西側の尾根と 2 筋の尾根に挟まれた谷筋の約 4,000 m² の測量を実施した。

今回の測量については、昨年設置した測量基準点を活用したため、調査の精度と効率化が図られた。

今年度の測量調査の結果、本丸から北東に延びる尾根について、東側の尾根については一昨年の調査により、連続する郭列が確認できているが、西側についても同じく尾根上に連続する郭列が確認できた。この郭列は、当初の不整形な構築から改築途中と考えられる台形状の郭列であり、西端に通路を兼用する土塁状の高まりが見られる。

第 16 郭についてみれば、北端はほぼ直線状にあるが、西半分について傾斜角が異なり整形途中と推察される。西端より第 15 郭及び犬走りに至る通路、東端より、第 5 郭及び第 7 郭に至る通路がある。第 17 郭、第 18 郭及び第 20 郭については、ほぼ平行する郭端をもち、第 19 郭の中程にその痕跡を見ることができる。これらのことは、当初、地形に合わせた縄張りを機能的に改築される過程とみることができ、長尾大隅守の築城以後の戦乱による長宗我部元親配下の国吉甚左衛門の入城、豊臣秀吉による落城までの間において、幾度かの改築をうかがわせる。

また、井戸跡の地から第 18 郭、第 19 郭及び第 20 郭に至る通路や各郭の西端部に位置する土塁状の高まりを利用しての通路もあり、第 16 郭からは、西端より第 15 郭及び犬走りに至る通路、東端より第 5 郭及び第 7 郭に至る明確な通路がある。

第21郭については、登山道によって、形状が明確でなく、機能的にも不明であり、今後の考証を待ちたい。

谷筋には、明確ではないが、3段の連続する豎堀状の遺構群が展開し、その下部に6基の井戸跡が続く。最下部の2基は後世の築造であることが判明しているが、上部4基については、発掘調査により、その形状、機能、築造年代を明らかにしたい。

井戸跡下部の平坦地については、ほぼ方形に整形されており、上部に通じる通路もあることから、郭の機能を有するものと考えたいが、現時点では判断を控え、次年度以降の調査によって結果を得たい。

以上、今年度は上記2遺跡の調査を実施した。熊倉池東古墳については、開発を伴う調査して実施し、また、そうでないものとして西長尾城跡の測量調査を実施した。

西長尾城跡については、次年度以降も継続的に調査を進め、早い段階で全体像を掴めるような資料づくりをしていきたいと考えており、今後、当該事業を実施していくうえで、この調査で得た成果を効率的に活用していきたい。

また今後の開発計画についても、この調査成果に基づき的確な遺跡の保護についての提示をするとともに、事前協議を進めていき、文化財行政の活用・保護についての貴重な資料としたい。

報告書抄録

ふりがな	あやうちょうないいせき はくつちょうさ ほうこくしょ							
書名	綾歌町内遺跡発掘調査報告書							
副書名	平成10年度国庫補助事業報告書							
巻次	1999. 3	シリーズ名	綾歌町内遺跡発掘調査報告書		シリーズ番号	第3集		
編集者名	綾歌町教育委員会 副主幹 新居 勉 調査員 近藤 武司							
編集機関	綾歌町教育委員会							
所在地	〒761-2492 香川県綾歌郡綾歌町栗熊西1638 TEL0877-86-5963 EXT234							
発行年月日	1999年3月31日							
頁数	例言・目次等	本文	図版	総頁				
	5頁	19頁	12枚	26頁				
ふりがな	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
所収遺跡名		市町村	遺跡番号	° ' "	° ' "			
くまくらいつひがし 熊倉池東 こふん 古墳	綾歌町栗熊西 字熊倉221	37384	00176	34度 12分 58秒	133度 53分 15秒	1998. 12. 26~1998. 12. 27	400	土砂採取
にしながおじょうせき 西長尾城跡	綾歌町岡田上 2312-10, 13	37384	00035	34度 12分 1秒	133度 52分 11秒	1998. 09. 01~1999. 03. 11	4000	遺跡分布調査
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構	主な遺物	特記事項		
熊倉池東古墳	古墳	古墳(後期)		横穴式石室 墳丘 周溝				
西長尾城跡	山城	室町		郭 堀切 井戸 土塁	瓦片 土師器片			

平成10年度国庫補助事業報告書
綾歌町内遺跡発掘調査報告書

平成11年 3月31日

編集・発行 綾歌町教育委員会
綾歌郡綾歌町栗熊西1638
電話(0877) 86-5963
印刷 四国工業写真(株)